

日本建築学会 1976. 10. 13 18:00～

対談「建築をつくる」山口文象 聞き手：佐々木宏

佐々木：本日のテーマである「建築をつくる」ということは、職人が造るという場合もあれば、いろいろな段階での技術者もいれば、さらにもっと大きくはお金を出して作るクライアントもいる。そこで 山口先生はキャリアの豊富な方ですので、いったい建築をつくるということとは、どの段階でだれがどのようにして、どんな意味が込められているのか、その辺からお話をいただけるとありがたいと思います。

山口：建築をつくる、これには「造る」と「創る」の二つがございます。建築をつくるということは広く意味を持っている。私の経験は、はじめから三角定規やかんなをつかって、つまり最初は触覚から建築をつくることから出発しております。セメントを混ぜたり、かわらを屋根の上に運んだりして、「造る」ことからはじめたのでございます。

だんだんやっているうちに、そのような仕事の積み重ねだけで建築はできるのだろうか、疑問を持ってまいりました。造られた空間の中で人間がどう生活し、われわれがどう動くか、そういうことをトータルに総括する空間、それが建築ではないか、と考えるようになりました。

私は清水組にはいり、17歳の時に名古屋に赴任し、現場の人夫をやっておりました。まさに建築を手で作るという低いグレードのところで働いておりました。

しかし、どうしても建築をクリエイションの立場で創ってみたいと思うようになり、決心が固まって名古屋を出奔して、東京へ帰ってまいりました。

その間にいろいろと本を読みまし、人の話を聞きましたりいたしまして、自分の考えを発展させてまいりました。そこで建築というのは、ただ製図板の上で図面を書いて、請負業者のひとたちが見積もりをして、建設する、そういうプロセスばかりではなく、その奥に建築家が考えなければならぬことがたくさんあるのだ、ということを教えられました。当時は、世の中も世界も非常に複雑な情勢の時代で、ティーンエイジャーの私もいろいろと影響を受けました。略

土台があつて上物があるのは、建物であつて建築ではない、とだんだん思うようになりました。建築というものとは人間が幸せに生きる場であり、それが建築家の仕事だと考えました。私は学校に行かなかったのですが、欲張りなので、英語やドイツ語などを神田あたりでまなびにいきました。新聞とか歴史の本とか絵の雑誌とか拾

い読みして、言葉の練習をしておりました。

そのなかで私は、モナーテ・アルキテクチャという雑誌を読みまして、ワルターグロピウスが小さな論文を書いておりました。その大意をおぼろげに覚えているのですが、人間と建築ということについてグロピウスが明確に言っていたのは、建築は建物ではない、レンガを一つ一つ積み上げると建築になるのではないと、われわれは20世紀の人間の幸せのために建築を勉強しなければならないと書いておりました。

今考えてみると、これはグロピウスがワイマールでパウハウス設立の以前のことで、これに私は感銘を受けまして、自分の先生はグロピウス以外にはないと、このように考えたのです。こうして私の建築家としての歩みが始まりました。

佐々木：先生はドイツにお出かけになって、20世紀のもっとも建築家らしい人に師事されるという貴重な体験をなさったのです。ドイツにおけるグロピウスを中心とするような建築家像は、そのころの日本にはまだ確立していなかったと思うのですが、西欧社会の建築家像について山口先生がお感じになったことをお話しください。

山口：その時分の日本の建築家のグループは貧弱でございました。そのころの建築家と称する人は、文部省、通信省、司法省、大蔵省などに、東京帝国大学などを卒業したエリートが入り、国家の予算で建築を造っている者でございました。民間の建築家というものはほとんどございません。民間で一番仕事をされたのは、辰野金吾先生のような、皆様よくご存知の方でございました。

私はこの日本建築家協会の創立者である中條精一郎先生を存じ上げたことが、非常に幸いでございました。名古屋を出奔いたしまして、建築家になろうとして帰ってまいりましたが、お金がなくなるとかしてどこかに就職したいので、丸の内の中條先生の建築事務所にまいりました。当時一丁ロンドンといわれた通りのレンガ造りの長屋の中で、曾根・中條建築事務所がありました。純粋に民間の建築事務所で、二人の協同でした。中條精一郎先生の作品は、銀座の交詢社、神田のYMCAなどです。

わたしは中條先生を尊敬しており、雇ってくださいとたずねたのです。雇えないけど、いろいろと紹介をしていただき、あちこちに参りましたが、断られ続けて最後に通信省の営繕課にまいり、中條先生の紹介状を出したところ、ちょうどひとり欠員があるから採用しようとなり、通信省に入りました。製図工で日給が30何銭かでした。

民間の建築事務所というのは非常にすくなくございました。中條先生は、このよう建築家の現状をなんとかしなければ、ということで、この日本建築家協会の前身の組織をつくられたのでした。その時代は、ビューロクラ

シー建築家だけが有名で、民間の建築家は零細な社会的地位は低い状態でした。

佐々木：ドイツではグロピウスを中心として、第1次大戦後ですけど、建築家が新しい思想を持っていろいろな芸術運動をして、なおかつ建築家がそれぞれ社会的・政治的な行動もしたのですが、そのころ日本の建築家との対比をするといかがですか。

山口：私がいた時のドイツでは、1928年から30年だったか、29年ころまでは日本の建築会では欧州大戦、第1次大戦のあとを受けて日本の産業は膨れ上がり、世界的な経済力を持ってきました。建築が活発に行われて、民間の建築家も相当に輩出してまいりました。若い民間建築家がでてまいりましたが、社会的地位は貧弱でした。

私はグロピウスのところに参りました。ドイツの建築界もビューロクラシーの相当強いところでしたが、それにもまして建築家のブントが強い。建築家のブントには右から左までいろいろの立場の思想的違いの人がありましたが、大体において自分たちはドイツ民衆の建築をつくるのだという意識が脈々としておりました。それは、グロピウスやミースファンデルローエなどの指導的建築家の影響力の効果だと思うのです。

ドイツの建築家は社会的地位が高い、大学でも建築の学生数はすくなく15、6人くらい、もっとすくないのは7、8人とすくない。その大学の建築科を出るとゼントルマンとして社会が扱う。

例を言うと、シベリアからベルリンに入って、グロピウスのところに駆け込んだのでありますが、彼がいうには、お前のドイツ語はまだまだ話にならない、読むとか書くとかはできるかも知れないが、聞くことはだめだ。自分の親戚がこういうところにいるから、そこに二月ばかり行って暮らしてこい、そこはトーリングゲンという田舎があり、グロピウスの親戚が百姓をやっている、そこではドイツで一番ティピカルな訛りのないドイツ語をしゃべるのだということで、そこにやられました。いくらかしゃべれるように、聞けるようになって帰って参りましたが、そのときに一般の人がきくのですが、「お前は何しにドイツにやってきたのだ、何が専門なのだ」というので「私は建築家だ、建築の勉強をしているのだ」と答えると、そのころの私は髪を伸ばしていましたが、いっぺんに態度が変わるのです。「おお、お前は建築家か」とて、下にもおかない態度になります。建築家の地位は、医者と同じような高い地位にありました。ドイツの建築家を尋ねて回って、その感を強くしました。

バウハウスがグロピウスによって作り上げられた、グロピウスの奥さんはウィーンでの有名なプリマドンナで、美しい人でしたが、ちょうど私がいたころ、フィーガーというグロピウスの腰ぎんちゃくのように仕事をしてい

た人ですが、そのフィーガーから聞いたことですが、グロピス夫人の家は非常に豪奢で、ウィーンの社交の場であり、そこに画家とか建築家たちが集まるサロンでした。

その奥さんとの間にゲルダという名前の、美しいお嬢さんがいました。あるときそのサロンに、フルトベングラが参りまして、お茶のみ話をしておりましたが、そこにお嬢さんが芝生から、鹿の角を捕まえて一緒に入ってきて、お客様の前でひざをちょっとまげて挨拶しました。

その情景が印象的だったのですね。そのときに一緒にいた若い作曲家でありバイオリニストが、その情景をソナタにしました。

その奥さんとグロピウスとは、グロピウスが第1次対戦の戦線にいたころに、ある音楽家と仲がよくなり、ひびが入って別れることになるのです。

ワイマール共和国で、美術の学校を作ろうということになり、グロピウスが新しい教育の場としてバウハウスを作ったのですが、このときに有名な画家たちを集めることができたのは、この奥さんのネットワークであったのです。

佐々木：先生はグロピウスと一緒に、ドイツから亡命を目的にロンドンに移られた時に、ご一緒に行かれたとか、。

山口：ヒットラーが政権を取ったのは1933年でしたか、国内の組織をナチとして全部変えてしまいました。いわゆる自由主義者、民主主義者そのような考えの芸術家たちを追放しました。その中には、ブルーノタウトがいます。グロピウスもちろん、その筆頭です。私がベルリンに入る前に、ソビエトとポーランドの国境をこっそりと超えまして、ウクライナのあたりをうろつくことになりました。そのために要注意人物でした。わたくしの周辺にも追放された人たちがいました。そうすると24時間以内にでよ、コースもベルギーを通過して出て行けということです。グロピウスも私もおいにあわてまして、ドイツを逃げ出しました。グロピウスが言うには、行く先が問題で、フランスににげてもそのうちにドイツにやられるに違いない、これはドーバーを越えてイギリスに行くしかない、ということになりあました。ベルギーを通過するのはまことにグルーミーな風景でしたが、ドーバーを越えました。

ロンドンではもちろん大歓迎で、厚遇しました。私は一回の貧乏学生ですので、長くはロンドンにおりませんで、船でマルセイユから帰ってまいりました。地中海では潜水艦が心配でしたが、無事に帰り着きました。グロピウスは10年何年か前に日本にやってまいりました。それまで音信不通でお会いしないでおりました。

脱出に状況はそういうことで、タウトたちもみなそのような状況でした。

佐々木：お帰りになってからご苦労が多かったと思いますが、どちらかというと色目で見られたという伝説があるのですが、その辺はいかがですか。

山口：不愉快だったことはたくさんございます。実は、ヨーロッパの話ですが、ハイデッガーがハイデルベルクで講義をしていました。グロピウスにたのんで私はハイデルベルクに行きました。近代哲学のオーソリティーとしてハイデッガーを、私は尊敬しておりました。その当時、サルトルもベルリンにいて、私も交渉をもちました。

Sの当時、ハイデッガーがヒットラーン命令で大学の総長に就任しました。そのときに声明を発表しましたが、それを読んで私は大変がっかりいたしました。人間こういうふうになるものか。その後、ドイツでもフランスでも、ハイデッガーが親ヒットラーの立場をとったことで、、、ハイデッガーへの批判が出て30年たってきました。人間の思想というものは、それほど重大なことです。

日本ではいかがでしょうか。戦争の最中には、軍部の肩を持って戦場に若い人たちを送り出した人たちばかりです。文学者、絵描き、建築家でも、おります。その人たちは8月15日を境に、全部デモクラシーに転向いたしました。声明を発表するのではなく、いつのまにか乗り換えているのです。

例えば、高村光太郎です。彫刻家としても詩人とし立派な方だと思います。しかし、戦争中にどのような行動をしたか、詩を書いたか、死人に鞭打つあけではありませんが、これについてとことん追求する文学者はおりません。

身近では、私情から申し上げるのではございませんが、内田祥三先生については弾劾せざるを得ません。昨年でございましたか、日本の建築学界の主催で、内田祥三先生のお祝いを非常に盛大にいたしました。私にも招待状がまいりましたが、出席はいたしません。日本建築学会で総意をあげてお祝いしたときに、出席きたひとたちは日本建築界の重要な人たちばかりです。

ところが、昭和18年のこと、日本はいよいよ軍の幹部も非常に少なくなりまして、学徒出陣ということになりました。そのときに東大をはじめ全国の大学から、これから将来力を持ってくる青年たち、これが6列縦隊で雨の中を行進いたしました。青年たちを戦場に送るそのときに、内田祥三は帝国大学の総長でありました。

私はあの实况をラジオで聞きましたが、1万に学生たちが雨の中を行進して、戦場へ送られていったのです。それを指導し先導し計画したのは、内田祥三先生なのです。私はこの建築学会の主催に対して、煮えくり返るような怒りと、悲しみと、人間を信ずることのできない、絶望的な瞬間を味わいました。

ドイツ、フランスにおいても、少しでもナチに関連し

た者はすべて挙げられています。ハイデッガーほどの哲学者さえもそうなのです。

建築家の中でも、戦前から戦後にかけての作品をご覧になったことがありますか。タイの日本文化会館など、ほかにもいくつもあるでしょう。作品とその説明書をごらんになりましたか。その建築家たちは、いつの間にやら今、日本の近代建築のリーダーとなっているのです。それほど日本人は撞着の天才であります。これが人間を考え社会を考え、人間としての建築家でありましょうか。もういっぺん考えてもらいたい。いまぼんやりしていると。世界はどうなっているか、

ヒットラーの政権になる前、共産党とヒットラーとの争いの騒然とした中で、ソビエトのスターリンの第1次5ヵ年計画は一応の成果を見て、第2次の五ヵ年計画に入ろうとしていました。そのころ、ドイツの若い30台の建築家数人と、フランクフルトアムマインにいた建築家たちが、続々とソビエトに渡ったのです。社会主義国家を造りたいのだ、そのスターリンの第2次五ヵ年計画にできるだけ協力したいのだ、というわけです。

私の親友でありました日本から来た医者（注：国崎定洞）もわたりました。このドクターは、東京帝国大学の医学部をでて将来を嘱望されており、ドイツ医学を学びにやってきました。医学となにか考えているうちに、ソビエトに渡って本当の社会主義国家のドクターとして生きたいと思ったのです。

ところが、これらソビエトに渡った医者、建築家たちはみんな、その後音信が絶えてしまったのです。わたしたちはドイツにいる間、どうしたのだろうと心配いたしました。当時いた千田是也たちと手を尽くしましたがわからない、とうとう30何年たってしまった。

熱情に燃えてソビエトに発った彼らは、スターリンの独裁政治に消されてしまったのでした。そのドクターの奥さんは、クレムリン宮殿のそばで自分の亭主をチラッと見たという、その奥さんは今ベルリンにいます。先日、その奥さんの歓迎会を学士会館でいたしました。結局わかったことはスターリンがそれらの人たちを犠牲にしたのでした。いろいろと政治の事情はあるでしょうが、私たちとしては納得が行きません。国際政治はそういう残酷なものです。

そこで、いろいろと社会政治は振れても、自分というものはいつもちゃんとしていなければなりません。そう私は思うのです。

佐々木：日本の建築家がヨーロッパの知識人のような主体性を持って行動したか。

山口：自分がドイツで友達になりました建築、全体ではありませんが、小さなサークルではございますが、その出の建築家というものは自分と社会、建築に関してどん

なスタンスを持っていたか、おぼろげながら想像できます。日本の建築家というものは、特に戦後の建築家は、日本の経済成長に伴って、非常に派手なデザインをするようになってきているように思います。この現象は、本当のものだろうか、なにかでがらりと崩れてしまうものだろうか、それは私が断言できませんが、非常に危なっかしい気がいたします。

音楽家でも、画家でも文学者でも、しっかりした仕事をする芸術家がおります。そういうひとが建築家にいるか、よくわかりません。そのような建築家の書いた文章など読むこともあります。なんだ非常に難しいことを言っていて、私にはよくわかりません。私は平均的な日本語はわかる人間ですが、その私がわからない難しい論文が輩出しております。

難しいことを書くと高邁な哲学であると思い、それをわからないながら感心してしまう、そんな傾向があるようです。新しい作品が発表される、雑誌に載る、それは自分の思っていないような急所をついてこられる、なるほどすばらしいものだ、と思う。それは非常に危険です。つまりその人の芸術家としての資質と、現在もてはやされるタレント性とは絶対に違うものです。どこまでがタレントであり、どこまでが建築家としての資質であるか。芥川賞になった「透き通るようなブルー」とかいう作品がありましたが、その作家はタレントであるか、それが文学者であるか、。

これは芸術家としての建築家、これはタレントとしての建築家、という判断ができる力を持ってほしい。どんどん流されてしまいます。毎月、きらびやかな作品の載った雑誌が出ます。それは国際劇場の舞台で飛んで跳ねているような、まことにアクロバットな作品が発表されています。これは本当に建築家の建築であるか、タレントの建築家の建築家か、よく判断してほしい。建築家ばかりではない、絵も最近はデッサンがなくなっている。現代音楽でも、めっちゃめっちゃに音を並べて、現代音楽を装っている。きちんと理論にもとずいた基礎的な訓練が必要です。それがないと新しい作品はできない。

クセナキスというギリシャの現代音楽家があります。音楽と建築という本を出しました。読んでみましたが、わかりません。それは私が音楽の理論を知らないからです。幸いにして私の長男は音楽家ですので、彼を教師にして教わっております。クセナキスは音楽と建築を数学的に考えている、区間と時間との差を徹底的に考えている。そういう風に、これからの建築家は、物事の基礎まで降りていって勉強することが必要とつくづく思います。

佐々木：建築家は土の上にもものを作らなければなりません。これにはお金持ちのクライアントと建築家の関係にならざるを得ません。そのときに建築家はどうかあるべきでしょうか。

山口：第2次大戦が始まりまして、私は縁戚関係がありまして、海軍の仕事をやらなければならないことになりました。海軍からは、この仕事をやるようにと命令が参りましたが、私は反戦主義者でございましたので、武器の工場をデザインすることは絶対にいやだと表明いたしました。私は戦中に兵器工場の設計をしたことはありません。当時はどこからも仕事は来ません。

全国から兵器工場に、徴用工が集められ、兵器工場の近所に宿舎をつくることになりました。私が担当したのは山口県の光市の工場で、徴用工のひとたちの宿舎を造ることでした。もうひとつは家族もちの家のタウンプランを光市の郊外にやりました。

安いバラックを早急を作る仕事でしたが、一生懸命にやりました。これが私の戦中の仕事です。工場ではなく、そこではたらく人たちが、休養しよりよい生活ができるように一生懸命に考えました。いまでもその図面がRIA事務所に行くところだと思います。

これが私のひとつの思想で、クライアントと建築家のひとつのかかわり方だと思います。その後、このようなことはRIAの仕事では、私が病気のためにほとんどタッチできなかったのですが、RIAの皆さんはこのような考えが通じていると思います。

そのような思想を通そうとするものですから、貧乏をしてきています。

佐々木：厳しい先生の態度を伺って、身が引きしめる思いです。物を作るということについて、建築家としてどう考えるべきか

山口：建築というポイントを取り囲んで環境をどう考えるか、日照問題、交通問題などを総合的に考えるべきです。オーナーが要求していることと、近所に暮らしている人たちとの要求を、総合的判断して設計するべきです。オーナーはその建築によって利益をうる、そのオーナーに対してしっかりと建築家としての意見を表明すべきです。そのために、その仕事は他の建築家に行くかもしれない、それによって不利益をこうむるかもしれない、それは仕方ないことであります。その筋を通したことにより貧乏になることを恐れてはいません。貧乏しなくなかったら建築の仕事はできません。

会場：1921年、1925年、仲田定之助邸や朝日新聞社等、当時としてはヨーロッパの新しい建築の動きに呼応しているのですが、それは先生はどういうふうに関心したのか、どう考えたのか。

山口：当時はヨーロッパの風潮に染まった建築が流行思想した。私のそれもそうです。しかし日本のそれは外見

はヨーロッパ的ですが、プランニングはまったくそうではありません。その時代の住宅のプランはほとんど大正時代の日本の住宅です。どれもご覧になると分かりますが、私の作品はまったく違うプランニングです。そのあたりを私の作品の特徴としてお汲み取りください。その当時のヨーロッパでは新しいプランニングがでていました。私はそれに沿いたいと思っておりました。

この頃でも、プランニングや構造を無視した格好だけの建築が多いと思います。それは建築の形をした只の箱です。例えば、白井晟一先生の作品は、プランも構造も無関係で外観だけの建築です。これは私は不満です。それならば、彫刻家は建築家の真似して何でもできるのです。それは建築ではありません。プランとか構造がおのずから外観として出てきたのが建築というものです。もちろん建築家はいろいろあるでしょう。それはそれでけっこうですが、私は違います。

(注：この記録は、講演当日の私的な録音テープから伊達美徳が書き起したものである)